

随縁
随意

チェンジャー英文誌 アジアにおける 生物工学分野のトップジャーナルへ!! 英文誌編集委員長 大竹 久夫



英文誌のスタイルが変わったことをご存知でしょうか？今年から英文誌が有料配布になりましたので、まだご存知ない方もおいでになるのではと危惧しております。ぜひ一度、学会のホームページを覗いてみてください。Elsevier社のデザインによる新しい英文誌の表紙には、昨年表紙写真コンテストで優勝された、筑波大学王碧昭先生の糸球体上皮細胞のカラー写真が使われています。表紙を飾るカラー写真につきましては、今後も公募を行い半年ごとに更新する予定です。ところで、今回の英文誌の変更は一昨年秋から取り組んで参りました当学会の収支改善に伴うものです。海外大手出版社のElsevier、SpringerおよびWiley-Blackwellの3社と交渉を重ねた結果、Elsevier社と新規契約を締結することとなり、昨年10月中国大連市におきまして塩谷捨明会長とElsevier社のB. Straub氏により契約書の調印が行われました。今後は、編集委員が担当する業務を除きまして、Elsevier社が表紙のデザインから印刷原稿の作成までを担当します。このため、英文誌の表紙にはElsevier社のロゴが新たに登場しましたが、当学会のロゴを左上に据えることにより、本誌が当学会の英文誌であることを主張したつもりです。本文につきましても、一頁当たりの文字数を増やすため使用フォントと文字サイズが変わりましたが、論文タイトル、要旨や文献表記などは、これまでの英文誌のスタイルをできるだけ継承するよう努めました。また、昨年秋からElsevier社より無料提供された電子投稿編集システムを使用することにより、編集作業はさらに円滑なものとなっております。もちろん、これらの取り組み全体が学会の収支改善に大きく貢献したことは言うまでもありません。

英文誌は今、成長するアジアにおける生物工学分野のトップジャーナルを目指しています。英文誌の年間原稿受付数は、2006年には312に過ぎませんでした。2007年に406と初めて400台に到達し、2008年には481にまで増加しています。海外からの投稿数も増え続け、2006年に105であった年間受付数は、2008年には239と倍増しています。一方、論文の受理率は投稿受付論文全体では約45%、海外からの投稿論文に限って言えば約24%に留まっています。年間原稿受付数が500に届こうとする中、編集委員一人当たりが担当する論文数は、年間20を超えるに至っています。海外から盗作論文が投稿されてきた事例も一度ならずあり、論文の審査にはこれまで以上に神経を使わざるを得なくなっています。編集委員の多くは研究活動にも積極的に取り組んでおられる若手の会員であり、編集作業の負担増が気になります。言うまでもなく、学会本部で英文誌の編集に従事されておられる方々への負担は、さらに厳しいものとなっております。会員の皆様におかれましては、このような状況をよくご理解頂き、英文誌投稿論文の速やかな審査にご協力をお願い申し上げます。英文誌のインパクトファクターは、2006年に1.136と初めて1.0を超え、2007年には1.782にまで増加しています。面白いことに、英国のTaylor & Francis出版社から頂戴した資料によりますと、国別にみたJBB掲載論文引用回数の過去5年間の伸び率は、ブラジルが600%、中国が350%、スペイン、韓国およびインドがそれぞれ200%を超えているのに対して、日本国内での引用回数の伸び率は-100%とむしろ減少しているようです。また、Elsevier社提供の統計資料によりますと、2007年の段階で過去2年間に一度も引用されなかった英文誌掲載論文の割合は35%もあり、5年間のスパンで見ましても32%あります。英文誌掲載論文の約3分の1が、2年間に著者自身も含めて一度も引用されていないことには、驚きを感じざるを得ません。会員の皆様におかれましては、英文誌に掲載されたご自身の論文を、掲載年から2年以内に、より積極的に引用して頂きますようお願い致します。

最後に、今年11月に神戸市で開催される国際学会APBioChEC2009の要旨集を英文誌の特別号として出版する予定です。この要旨集の編集作業にはElsevier社より紹介のあったOxford Abstract社の簡易編集システムが使われます。このシステムは大変良くできており、ほぼ自動的に要旨集の編集が可能で、アジアを中心とした国際学会を開催される場合には、英文誌特集号を要旨集や論文集にお使い頂けますと、英文誌の宣伝にもなりますのでぜひご検討下さい。

著者紹介 大阪大学大学院工学研究科（教授）